

モード Mode は語る

中野 香織

貧相に見える仮装衣装

日本が世界の標準からずれていると指摘されるのが、結婚披露宴に出席する男性の装いである。黒い礼服に白やシルバのタイという組み合わせは、物資が乏しかった第2次世界大戦後に、アパレルメーカーが提案した冠婚葬祭システムである。都市部では世界標準になった華やかな装いに移行しているが、なじんだ慣習を踏襲している地域はまだ多い。黒礼服を1組もち、白と黒のネクタイで冠婚葬祭すべてをカバーできるのは合理的なので、なにも世界標準に合わせる必要はない、との意見にも一理あるだろう。

百歩譲っても、世界標準から完全に浮いている装いがある。新郎の、上着丈の

ブライダルタキシード

長い、合繊素材のブライダルタキシードなるものである。色やデザインにおいても仮装衣装であり、新郎を貧相に見せるばかりか、花嫁のドレスの格まで下げる。いまだに一部の結婚式場で提案されるため、言われるまま着せられている。

この惨状に異を唱え、正しいタキシード文化を創出しようと活動するのは、東京・南青山にタキシード専門のアトリエ「ロッソネロ」を構える横山宗生氏である。横山氏によれば、結婚式は新郎新婦の2人が主役であるはずなのに、日本では新郎がおまけ扱い。ゆえに誰も新郎の仮装衣装に疑問を抱かず、式場スタッフも正確な知識をもたないので、世界から



ロッソネロが展開する正統派のタキシード

笑われる珍奇なブライダルタキシードがいまだに幅を利かせているという。

夕刻からの結婚式に際し、新郎が上質なタキシードを1着、選び抜くならば、小物や靴を変えることで式においても、披露宴においても、2次会においても、これをすてきに「着まわす」ことができる。さらにこれを機に新郎がフォーマルウェアに関する正しい知識を学ぶことによって、夫婦のその後に訪れるさまざまな機会に自信をもって臨むことができるのだ。フォーマルのルールは男性の服装が基準となっているのだから。

自分はなぜこれを「着せられて」いるのか、その慣習の理由を知り、正しい知識を得て主体的に「着る」ことを選ぶというささやかな行為の積み重ねもまた、自分の人生のかじ取りをする実感につながるはずである。(服飾史家)